

学位請求論文要旨

本願寺教団展開の基礎的研究

—戦国期から近世へ—

青木  
馨

## 本願寺教団展開の基礎的研究 — 戦国期から近世へ —

本書は、序論、第一編、第二編、第三編、総論、結語より成る。

序論では、研究史と課題を概説した。従来の真宗史研究の多くは、戦国期や近世といった時代区分の中で考察される傾向にあった。本書ではこうした時代区分を克服しつつ、戦国期成立の地方道場の近世的寺院化への動向について注目する。

第一編は、蓮如在世中の文明期の道場の存在形態が知られる佐々木上宮寺の『如光弟子帳』の分析と天正十九年末寺帳の展開へと論及した。さらに、本願寺直属坊として成立する本宗寺についての考察と並行し、三河を事例とした蓮如本願寺の地方教団成立の様相について考察した。それで近世後半に、伝承化されてゆく末寺由緒の成立以前の同時代史料での考証に焦点を当てることに心掛けた。それは、後に三河三箇寺として君臨する上宮寺・本證寺・勝鬘寺や教力寺の直參大坊主などが、すでに蓮如帰參時点で、三河の大半の道場・門徒を掌握していたことが背景にあったと考えられることによる。そして実如下付の絵像本尊の多くも右記三箇寺を手次としている。さらに他の大坊主傘下の門末も含め、伝承する絵像本尊類の裏書を可能な限り列挙し、これらを地図上に落としてみた。その大半が西三河矢作川流域と沿岸部、木曾三川下流域に集中することを確認し、川・海型門徒を中核とする門徒集団の性格を指摘した。ただ本宗寺の成立事情については、史料的な制約もあり明確に検証し得なかった。一方、蓮如期帰參を伝える多くの末寺由緒には、応仁二年（一四六八）蓮如結縁説を見る。これは、如光門徒の西端惠薫（応仁寺）や光存（本證寺）に対し、同年五月二十日に裏書付の墨書名号を与えたことと関連する。さらに、如光も同年十一月に没する。おそらくこうしたこともさらなる背景となり、この年が記念的年次として記憶され、蓮如巡錫伝承が醸成されたものと理解される。そして、これらの多くが蓮如伝承へと帰結する。そうした動向を裏打ちするかのようには、三河門徒は他に先んじて墨書名号を授与されだした可能性も指摘し、第三編第二章でさらに言及した。

また、本宗寺は、三河門徒の与力化のなかに、土呂坊と海浜要害の島に創立された鷲塚坊との二坊体制となる。そしていずれも寺内が形成されていた。これは、実如息男実円が、播磨英賀坊（本徳寺）との兼住となることにより、後の大坂本願寺を中核とする海上ルートのネットワーク形成がその最大要因と考えてみた。英賀本徳寺は、蓮如没直前の明応七年（一四九八）にすでに寺号を称している。こうして、両寺が蓮如開基として伝承化されるが、両寺は、実如・円如期本願寺教団形成の延長線上で、位置付けるべきであろう。この点は今後の課題でもある。

第二編では、本願寺の門跡成による権威化と組織化、末寺の拡充にともなう身分上昇について、その性格と権能を家元制という視点で考察

した。家元制は近世的な職能・芸能など、広範な結集軸を中心とする集合概念である。蓮如による裏書記載された礼拝物下付行為は、それ自体が安置許認でもあり、すでに家元制の先駆の様相を示していると見られる。以来、本願寺門主は、ひとりこれを継承し拡大することになるが、あらためて相伝権・授与権・儀式執行権などの権能と重ね合わせることにより、その性格が明確に家元的性格を帯びることを確認した。そして、絵画史料により、先行研究ではあまり注目されたことのなかった装束や紋に焦点を当て、本願寺門主や一族、さらに近世の地方末寺住持らの教団内身分について論及した。その実例として、蓮如の八男蓮芸嗣子の教行寺実誓影像(天正七年 頭如下付)を取り上げ、装束・紋について同時期の証如・頭如影像などとの比較を試みた。そしてここにも、門主に次ぐ一族の権威化の一面を見出し得た。

これは、近世の触頭級大坊の歴代住持似影にも反映され、さらに近世後半には一般末寺にも三官の主に「余間」への動きが同様に読み取れる。すなわち、戦国期における一門・一家の権威化の動向が、近世の末寺へと展開することを提示した。これは本願寺門主一族に擬制的に加わることを示し、ここに、寺として住職家の確立という非形象的部分の構築が見られる。第三章では、これを象徴的に示している似影の五条袈裟の「紋」に注目し検討した。草野頭之氏の近世初期の本堂内部の荘厳化の指摘もこれと軌を一にするものであるが、余間昇進による前門主の「職掌御影」の奉懸も荘厳化の一環である。ただ装束については、名称と形態がいまだ不明瞭で今後のさらなる究明を要する。

そしてこの住職家の確立は、近世末寺の身分上昇と表裏をなすものであった。その大きな要素となるのが由緒書であり、安城市願力寺史料により明瞭となった。余間昇進にともなう詳細を記した史料は、地方末寺の昇進に対する多額な金銭上納に加え、本来の如光門徒ではなく、蓮如直弟と武家の血統を引く「家柄」を由緒に表現する。もともと由緒書については、史料的にはそれほど大きな意義付けがなされてこなかったのであるが、本願寺教団においては三官昇進の重要な要素であり、あらためてここに注目するとき、付随する関連法宝物も、親鸞や蓮如に直結するものが重視されることとなり、両者に仮託された意味も見えてくる。この点からあらためて、下付物に注目するとき、裏書を付さない多くの墨書名号に「蓮如筆」という伝承が付随することになるが、従来その判断は曖昧であった。

こうした観点から、第三編では「蓮如筆」とされる墨書名号を中心とする下付物全体について、あらためて検討した。

まず蓮如により確立された本尊や開山親鸞影像などの影像類について着目した。そしてまず裏書の書式や意味について検討した。裏書は表具の裏に直接記載される事例を示し、これが原形であり、貼られた「文書」ではないことにおいてその意味を考察した。さらに蓮如期に複数の下付物を受けた坊主に注目して、その規則性の有無を見たが、必ずしも明確ではないことが知られた。さらに実如も蓮如のあり方を継承拡充し、絵像本尊の数は急増し、開山親鸞・前住蓮如影像や親鸞絵伝なども、制限を加えつつも、同様に大坊主を中心に下付していった。一時的には、蓮如長男順如も絵像本尊を下付している。いずれにしても開山影像は「真影」ではなく「御影」の語を用いており直参寺院のみに下付されることは、頭如期までほぼ踏襲される。ただ、坐している礼盤に注目すると、蓮如初期には狭間が元来は三狭間であったものが、中途

より二狭間も見られるようになり、下付先の身分差が発生した可能性を示唆する。そして纏綱縁の礼盤像に固定化をはかったのも蓮如であり、開山の権威化はそのまま直参門末の権威化に連動していったことも指摘した。

また、墨書名号については由緒書や寺伝に付随して伝来する場合も多いが、裏書もなく、伝来も必ずしも明確とはいえない。特に、「蓮如筆」と伝える墨書名号の真偽の疑問から、幼児名号も含めて、第Ⅲ編第二章では墨書名号の筆跡の検討を中心課題とした。従来の真宗史研究において比較的甘い主観的判断で検討されてきたことに対し、これを客観的判断で判定できるようにタイプ別に提示した。その後、これは一九八八年に同朋大学仏教文化研究所研究叢書『蓮如名号の研究』として法蔵館より出版された。そして、斯界に一定の評価を得たようである。本書にも論文部分に補訂を加え転載した。そして、六字名号大量授与の背景は「御文」と一体的関係を見出し得ると指摘した。さらに、補論に幼児名号についての考察も追加した。伝存するこれらの多くは、やはり蓮如筆と考えられる傾向にあったが、これも由緒書や伝承の範囲から出るものではないと結論づけた。

本来真宗教団史は、本願寺史や寺院史での考察だけでなく、一般門徒にも調査や研究が及ぶべきであるが、この点についてはほとんど進展していない状況である。本書ではこの点も若干考慮し、第Ⅰ編第四章の補論で、門徒宅の御文本の実態を提示した。さらに第Ⅲ編第二章第三節で、名号をタイプ別に分類し、あらためて第Ⅰ編で事例とした三河教団において、絵像本尊と墨書名号・御文本の現存状況を見た。蓮如伝承の背景に、数的統計から史料性を見出すという試論である。

本書巻頭の序論において、すでに研究史とともに課題や問題点を述べたが、それに対してどこまで論究できたか心許ないかぎりである。「史実から伝承」という観点をキーワードとしてこれを念頭に縷々論述した。そして、総論もその多くの事例を三河地域から抽出した。親鸞伝承・蓮如伝承、あるいは教如伝承などを生みだす素地を探るため、まず第Ⅰ編では道場成立を史料の上から検討し、第Ⅱ編では戦国期本願寺の身分上昇と権威化、さらに近世における末寺の寺院化と住職家の確立を背景とする身分上昇と権威化の動向に注目した。そして第Ⅲ編では、それにもなう由緒書と付随する法宝物の伝承化を前提とした本願寺下付物や墨書名号についても検討した。そして、最後にその具体例を願力寺に見た。

蓮如教団の成立以降、教団全体が多様な宗教社会あるいは通俗的社会に在って、身分上昇と権威化は不可避的現象といつてよい。末寺に襲蔵される真筆の蓮如名号から、稚拙に改竄された文書類まで、全てこうした上昇と権威化の営為の産物と見て考察することにより、初めて学際的となる。教団の裾野に展開した由緒・伝承・旧跡の成立という近世的現象を視座に、戦国期・近世本願寺教団の形成と展開を考察したことが本書の内容であり、特色といえる。しかしながら、綿密な検討を怠った部分も多々あり、全て今後の課題である。

そして、この一文を巻末に結語として付した。